

(二) 第三・四段落

5 第一〜二段落をふり返って

第二段落までの考察から生まれた「ものは存在する」という結論をとおしてヘーゲルが考察の場にみちびきだしたものは、自分としての意識と外界のものであった。この二者とその相互関係をヘーゲルは「意識は自分であり、それ以上のなものでもなく、単なるこの人である。個別の人が単なるもの、つまり個別のものを知るのである」と記していた。そう記された「個別の人」と「個別のもの」がこれから検討する第三〜四段落の考察対象である。さっそく検討に入りたいところであるが、それに先だって前段落までの内容を手短かにふり返り、以後の検討にさいして念頭にとどめておくべきことを四点ほど確認しておくことにしよう。なお、この確認は感覚的確信がなんであり実際にどのような働きをするのかを理解するときに鍵となる Sinn の語義を「見る聞くなど感覚器官に固有の働き」で受けとめたときのことである。当然 sinnlich もそれに応じて語義や現実の働きが限定されることはすでに述べてあるとおりである。

15 第一は、「個別の人が個別のものを知る」と記すまえに、感覚器官に固有の働きがことばも論理も駆使できないことをいやがうえにもあからさまになるように、ヘーゲルが「それ〔もの〕が存在するのはそれが存在するからである」と記していた点にかかわる。こうした表現にとらわれるなら、泰山鳴動して鼠一匹ではないかと受けとめてしまう可能性が危惧される。一読しただけではほとんどなにも理解できない晦渋な文章からみちびきださ

1
れたことが、自分がいてものが感知されている、というなんとも単純な事実ひとつであるという点からも、その感ほうまれかねない。

5
しかしヘーゲルが知るといふ活動を包括的に一語で *Wissen* として設定することから叙述をはじめたという点とは、ヘーゲルが自分の視野をあらかじめ提示していたことを意味する。人間のあらゆる認識活動を *Wissen* で包括すること自体がヘーゲルの判断である。人間のふだんの生活から政治・経済やさまざまな職業、はたまた文学や絵画や音楽などにまでふくまれる多種多様な認識活動、そしてまたひとりの人間が一生のうちに蓄積する認識がほんとうに最終的に *Wissen* に収斂するかどうかは、まだだれも確定していない。そのように包括的な視野を設定しておくながら *Wissen* の多重多層の形態を論じないなら、考察は竜頭蛇尾におわるだけである。ヘーゲルの視野設定が容易ならざる企図から生まれていることは十分に推測がつく。「感覚↓知覚↓悟性↓無限性」という系列が設定されていたと推定できる第一章の構成をみるだけでも、泰山鳴動云々がなりたたないことはすぐに了解できる。第二段落までの検討から明らかなのは、ヘーゲルが人間の知る活動を包括的に *Wissen* として設定し、なおかつ日常卑近な理解を前提に、そしてその理解にそくして、ものごとの意味を感知する能力や考える能力が発動する以前にあり、その基盤にあつてだれにも否定しがたい場をつくったということであり、これから実質的な考察がはじまるということである。

10
15
このように考察の出発点を確認したところで、第二に、*Wissen* も感覚的確信もまだなにひとつことばを発していないという点をあらためて指摘しておきたい。*Wissen* も感覚的確信も人間はなにをどのように認識するのかとヘーゲルが考えぬいて得た把握からくりだされたものである。どちらもヘーゲルが *Begriffen* の活動をはたらかせた結果うまれたものである。その点では、がっちり組みあげられた構図や系列だけでなく、どの文も、ど

1 の語も、考察者ヘーゲルの *Begriffen* の結果である。ヘーゲルは対象に「直接的に」相対していたはずであったが、その「直接的」もヘーゲルの設定した場ではじめて意味をもつ。「この人」も「このもの」も、ヘーゲルが感覚的確信のなかに読みとったもので、感覚的確信がみずからそのように語ったのではない。

5 この点、つまりヘーゲルが感覚的確信のなかに読みとったものが第二段落の内容をなすという点をもっと正確に表現するならば、ヘーゲルは日常卑近な意識を自分の語彙をもちいて再構成した、と言いあらわすほうがより適切であろう。これが第三に指摘したい点である。「感覚的確信」自体がヘーゲルの創意工夫によって日常意識のなかに設定された *Wissen* の在り方である。感覚的確信のなかではたらく意識がことばを発するならばこうなるという叙述がうまれてくる根本の理由も、この再構成にある。感覚的確信をふくむ第二段落の内容がヘーゲルによって再構成されたものであるという点で、ヘーゲルの考察はなおヘーゲルの思考のなかにしか存在しない。

10 第四に指摘したいことはこの再構成にからむ。ヘーゲルが第二段落までにみちびきだした「意識があり、外界のものが感知されている」という状態を日常のなかでみずから体験中に確認することは不可能で、これは自分をふりかえり記憶にもとづいて再建する以外になかった。註解者が自分なりに再建をこころみた結果では、ヘーゲルが存在すると語る「自分」は想定されたものと考えざるをえなかった。それでも——意識する主体として存在を想定せざるをえないが、意識された範囲にはまだ存在がみとめられない——「自分」がヘーゲルの設定した考察の場に存在するとみとめることができたのは、日常卑近な生活のなかで確定的にその存在をみとめることができるからである。ヘーゲルが感覚的確信になりかわって語れるのも、日常生活のなかにある人間の意識を自分の語彙をもちいて再構成できるのも、この日常における人間の在り方が前提として基盤にあるからである。これが第四に指摘したい点である。ヘーゲルが意識と外界のものからなる考察の場に「自分」がどのようにしてあらわ

れたのかを説明せず、その意味では考察が不十分なまま、考察の場にすでに「自分」が存在するものとして叙述をすすめられたのも、暗黙のうちに日常卑近な人間の在り方を——つまり生身の人間の現にある姿を、自分自身を——前提としていたからである。

このように日常卑近な人間の在り方とヘーゲルの叙述をかみあわせられるようになったということは、ヘーゲルのつくついているはずの叙述の場——読者と共有する理解の場——がわずかではあるが見えてきたことを意味する。この叙述の場に読者の確認できるものが、意識としての自分があり、外界のものが感知されているというまったく単純な状態だけであるとしても、ヘーゲルの叙述する内容を自分の卑近な日常のなかで確認できるようになった意味は大きい。ヘーゲルの叙述する内容を自分の生活する世界に照らして考えることができるようになったからである。

これから検討する第三―四段落でもヘーゲルは独自の方法で対象を再構成しており、これからはその独自の方法をとらえることがなによりも大切になるが、例によってそれが厄介である。一読しただけでは理解しがたい文章がつづく。だからこれまでと同じく幾つかのまとまりにわけて検討し、徐々にヘーゲルの言わんとすることにせまることにしよう。なお、第三段落は短く、全段落が新たな思考プロセスを導入することによって第二段落の最後のまとまりを捉えなおすことに費やされているが、便宜的に三つのまとまりにわけて検討する。

一 第三段落 第一のまとまり

第一のまとまりは次のように訳出することが可能である。参考にした文献はこれまでと同じである。(今後は特に記す必要がないかぎり、この断りを入れない。)

1

——「しかしこの〔感覚的〕確信の本質をなし、〔この〕確信がそれ自体の真実として言いあらわす単なる存在には、よく見るなら、他にも多くのものがそのかたわりに〔単なる存在とは直接的に関係する以外の関わりをもたず、どのようにでも〕存在している〔ことが見てとれる〕。現実的な感覚的確信は、単にこの〔前段落で述べた〕単なる直接態であるだけでなく、〔実際に単なる存在のかたわりに、その単なる存在とは直接的に関係する以外の関わりをもたず、どのようにでも存在する〕直接態のひとつでもある。」——

5

以上の内容も一読しただけでは理解しがたい。新たな思考プロセスが導入されていることも、第二段落の結論部分がとらえなおされているということも、容易には見えてこない。だからまず最初の文の構成からながめていこう。

10

最初の文の構成と三つの思考プロセス

最初の文の前半は、関係節で限定された「……単なる存在には」までである。ヘーゲルはこの前半で第二段落の内容を手短かに反復し、そうすることによって前段落との関連をたもちながら、後半で新たな内容（他にも多くのものがそのかたわりに〔単なる存在とは直接的に関係する以外の関わりをもたず、どのようにでも〕存在している）を提示する。この文構成は内容の連関をうしなわずに文章を書き継ぐときによく利用される書き方である。内容の反復に関係節をもちいることも常套手段のひとつである。

15

このように最初の文には形式の面で面倒なことはなにもない。それにもかかわらず内容のほうはすんなり頭に入っていない。関係節によって前段落との連関をたもつ配慮がはらわれているにもかかわらず、その配慮にさえ気づかないおそれがある。

1 その理由のひとつはやはり「本質」と「真実」という語にある。第二段落の検討で双方の意味は一応のところ明らかになったが、文脈が新たになると、その文脈におけるそれぞれの語義を確認するために頭を動かそうとすまえに、どうしても一般に流布する意味ないし辞書的な意味が念頭に浮かんでくる。その意味を全面的に念頭から消しさることは容易くない。しかも前段落にあったのは「本質」ではなく「本質的なこと」である。その違いが気になりはじめるとう理解が先にすまなくなる。それだけでなく、こうしたおそろしく一般的な語は、具体的ななかで考えないと、なにが言われているのかもわからなくなりがちである。『精神現象学』の場合には、ヘーゲルに固有の事情がそれに加わる。

5 ヘーゲルは「本質」の語義も——「真実」の語義と同じく——まだまともに説明していないが、そもそもヘーゲルは一般の辞書に記されているような意味で「本質」をもちいているわけではない。一応の定義らしきものはヘーゲルの文章からみちびきだすことができるが、それはヘーゲル固有の考えからみちびきだされるもので、結局は語義のほうもこの固有の考え方を理解しなければ了解できない。それだけではなく「真実」も「本質」も叙述がすすむにつれて指示対象を変えてゆく。それもまたヘーゲル固有の考え方のなせるわざであり、その変転におうじてヘーゲルの意識像がつきつきに転じてゆく。したがってヘーゲルのもちいる「本質」と「真実」の語義を知るためには、まずもって辞書的意味や通念を棄てるのが大切である。

10 もうひとつの、そして語義の問題より大きい理由は、この二語の導入とともに新たな思考プロセスがはじまっていたことである。その思考プロセスは、当然、この二語が記されていた前段落にはじまっている。この点は気づかなかつたかもしれない。だから第一段落からの思考プロセスをここでさらっておこう。

15 ヘーゲルが第一段落の冒頭においた *Wissen* は考察対象としてあまりにも大きい。そのまま考察を展開したの

1
では論があまりにも粗くなる。緻密な議論を展開しようとするなら、どうしてもこの Wissen を碎かなければならない。それを意図してはじまったのが第一の思考プロセスである。それが Wissen の提示からそれを限定した
5
感覚的確信を経て「ものは存在する」という結論をだすまでの一連のプロセスである。このプロセスを展開するとき、Wissen を sinnlich によって限定すれば、考察の場に「ものと意識」しかのこらないということは当初から見こまれていたと考えなければならぬ。

10
第二の思考プロセスは——図式的に言いあらわすなら——「ものは存在する」という結論がみちびきだされる前後からはじまる。具体的には、第二段落で「真実」と「本質」の二概念を利用して、感覚的確信における実質の欠如と、意識と外界のものとの関係を叙述することからはじまる。第二の思考プロセスは第一の思考プロセスに
15
なけば覆いかぶさるように展開されていたのである。この新たなプロセスはいったん存在を確定したものに、あらためて思考をおよぼすプロセスである。

この第三段落では、そのプロセスを基礎に、さらに新たな思考プロセスが感覚的確信と外界のものにおよぼされてゆく。このように同一の対象にくりかえし思考がおよぼされる過程で、ヘーゲルに独自の思考が展開されてくる。したがって、この第三段落における「本質」の意味も、これまでと同じように、ヘーゲルの書いた文章からみちびきだす以外にない。ヘーゲルの語る内容をくわいてゆく過程でヘーゲルの考える筋道が見えてくると同時に、語義もまたわかるようになってくるわけである。

15
だからこれまでの検討と同じように、そしてその検討の結果を利用しながら、個々の文と個々の語句をひとつずつ読みくわいてゆく。そうすれば最初の文の前半はなんとか処理できるはずである。ヘーゲルは前段落の結論である「ものは存在する」を名詞化して「単なる存在」と表現していたことを念頭におきながら、部分的に切

1 つて検討することにする。

最初の関係節まで——「しかしこの〔感覺的〕確信の本質をなす……単なる存在」

5 第一のまとまりの冒頭にある「しかし」は前段落とちがって内容が複雑になることを示すだけなので、それに続く部分「この〔感覺的〕確信の本質をなす……単なる存在」から検討をはじめよう。この部分は原文で最初の関係節とその先行詞にあたる。

10 冒頭にある「この」は第二段落で主題的に叙述された感覺的確信をさす。右の訳ではその指示対象がわかるように「感覺的」を亀甲括弧のなかでおきながら、これはヘーゲルが前段落の内容を承けてこの段落の考察を展開することを明示的に告げたものである。

15 これで厄介な「本質」の検討に入れる。まず前段落にでていた「本質的なこと」(das Wesentliche)との違いを処理しよう。この語は第四のまとまりの冒頭の文「それ〔もの〕は存在する、これが感覺的な知にとって本質的なことである」にあらわれていた。この「本質的なこと」を文脈のなかで検討したときには、その意味を「肝心なこと」と受けとめておくだけで済んだ。「不可欠なこと」と受けとめることも可能であった。当然、合わせて「必要不可欠なこと・肝心なこと」と言いあらわすこともできる。「取りさつたら感覺的な知が成りたないもの」でもよかった。感覺器官に固有の働きによって感知されるだけで確信される存在は、卑近な日常のなかに

——「このドイツ語原文の das Wesentliche を「本質的なこと」と訳すか「本質的なもの」と訳すかの問題にはふみこまない。適宜「こと」と「もの」とを訳しわけるだけにする。

1 いる生身の人間が稀であるがスナップショット状態にみずから確認できるものでもあるから、文意がとれるかぎりこのように日常語をもちいてよいと考えられたからである。

5 この意味を念頭におきながらも一度右のゴシック体で打った文をながめてみよう。この文は形のうえではふたつの文からなる。しかし前半の「それ〔もの〕は存在する」のあとと読点（原文ではコンマ）であり、その内容が「これ」で受けられ、それを主語に設定した文「これが感覺的な知にとって本質的なことである」が次にくるので、右の文は実質的にはひとつの文である。

10 この文における「感覺的な知」は、すでに明らかなように、「感覺的確信」と同義である。ヘーゲルのことば遣いは意外にゆるい。しかしこのゆるさを強いて咎めだてする必要はない。段落冒頭で「感覺的確信」と呼んだものをあとで「感覺的な知」と呼ぶことは、主題的に述べてきた感覺的確信が Wissen を限定したものであったことをあらためて読者に想いおこさせる配慮であろう。哲学書ではもともと厳密なことば遣いをもとめられると考へ、このテキストのことば遣いを「ゆるい」と形容することは、文章を書く者としてヘーゲルを見るかぎり、適切でない。この第三段落で問題となることは、こうした表現のゆるさが「本質的なこと」と「本質」との意味上の違いにまでおよんでいるかどうかである。

15 この点を確認するために、「感覺的な知」と「感覺的確信」が同義である点と、「ものは存在する」が「単なる存在」と言いあらわされていた点とを利用して、右のゴシック体の部分を実際にひとつの文にしてみよう。すると「単なる存在が感覺的確信にとって本質的なことである」という文がえられる。次に第三段落の最初の関係節を独立させて先行詞とともに文にするなら「単なる存在が感覺的確信の本質をなす」がえられる。

このふたつの文を比べるなら、一見してすぐわかるように、違いは「に」とって本質的なことである」と「の本

1 質をなす」という文言の違いだけである。ヘーゲルがなんのことも入れずに「本質的なもの」を「本質」と言い換えた点を考慮するなら、双方の違いは「にとつて」と言いあらわすかどうかだけであるとさえ言えそうである。

5 本来にそう言えるかどうかを確認するために、問題としている語の一方である「本質的なもの・こと」(das Wesentliche)という表現が生まれる過程を見てみよう。これは名詞 Wesen をいったん形容詞に変え、次いでそれに定冠詞をつけて名詞化した語ないし表現である。わかりやすい説明の仕方をもちいるなら、これはいったん一般化・抽象化してから具体的なものを指し示すためにつくられた語であると言いはらわすこともできる。一度「本質と言えるものの性質や状態にある」と適用範囲をひろげ、それから「その性質・状態をもつもの」と言いあらわすことは、端的に「本質」と言いあらわすより、対象の捉え方がゆるいことはまちがいない。しかしその違いは言いまわしの違いに吸収されないほど大きいのだろうか。前段落の内容を手短に反復するときに断りなしにこの言い換えが生じているということは、そうではないということを示唆するのではないか。

10 「本質」のほうにも検討すべきことがある。その原語 Wesen を語形から見るなら、これは動詞 sein (英語の be) としてまとめられるいくつかの語形を構成する要素のひとつと重なり、Wesen 自体が「存在するもの」の意をもつ。それを簡潔に記すと「存在」となる。この語は、前者の意味をたもって、ein kleines Wesen (小さな存在＝子ども) のような用例も可能である。どの例もどの訳語も「本質」ではなく「存在」にからむ。ところが、こうした意味を「存在」で代表させて「単なる存在が感覺的確信の本質をなす」に組みこむと、「単なる存

一 ラテン系の語である英語の essence の場合、語としての形成過程はよりわかりやすいものになる。

1 在が感覺的確信の存在をなす」という、同語反復をふくむ意味不明の文ができあがる。こうなると Wesen が単なる Sein と同義でないことはわかるが、やはりどうしても、ヘーゲルがなにを考え、どのような意味を「本質」にあたえたかを捉えなければならなくなる。

5 そのためには文脈が不可欠になる。そもそもここで問題としている、語義の違いとからみあった言いまわしの違い（具体的には「にとつて」的なことである」と記すか「の」をなす」と記すか、端的に「の」である」と断定するかどうかの違い）は——あとで実際に検討するように——言わんとすることは基本的に同一でありながら、文脈に応じて種々に使い分けられる言いまわしの違いの範囲内におさまる。こうした個々の言いまわしの違いにふくまれる意味の違いは、ヘーゲルが個々の文脈のなかで考えていることを、文脈それ自体から把握できないかぎり、確定的に語ることができない。

10 ところがその手がかりは今のところヘーゲルの展開した文脈だけであり、それは右に記したように前段落の内容を手短かに反復した箇所です。語の言いかえが生じていることだけである。したがってここで断定的に語ることはできない。そうではあるが、前段落の内容を手短かに反復し、そうすることで前段落との連関をたもちながら新たな内容を提示するとき言い換えが生じていた点を重視するならば、件のふたつの文は実質的に同意であることを示唆すると受けとめてよいのではないか。

15 ここではこの示唆を事実として受けとめ、「本質的なこと」と「本質」との意味上の違いは言いまわしの違いによって生じているだけで、「本質」の語義は「あるものにとつて必要不可欠なもの（要素）」の意であると解することにする。修正が必要になる文脈がでてきたら修正すればよいだけのことである。

なお、ゴシック体で語義を記した右の表現には、「必要不可欠なもの」に丸括弧をつけて「要素」をおぎなっ

1 である。「要素」も「存在するもの」であることには変わりがなく、わかりやすさを第一にするなら、「もの」と言いあらわすより「要素」と言いあらわすほうが、より現実の事物や事態にそくした表現になるからである。しかし、「ものは存在する」と言われた「もの」は、存在が感知され確信されているだけで、まだ内部の構成を問える段階にない。全体としてひとつとして認識されているにすぎず、分解することも、分析することもできないものに「要素」という語を適用することはできない。したがってこの補いはまったく便宜的なものである。ヘーゲルが「存在するもの (Wesen)」という、常識的に考えるならあまりにも意味の広い語をこの段階でもちいる根本の理由も、この点にあるだろう。

10 また、「単なる存在」はまだ存在を感知され確信されただけにすぎないから、「質」を問えない。したがって漢語の「本質」を「本の質」と捉えようと、「もともとの質」と捉えようと、辞書的に「そのものとして欠くことができない、最も大事な根本の性質・要素」と捉えようと、どれもヘーゲルのもちいる「本質」を理解するには不適當である。「本質」という訳語自体がこの段階では不適當である。だから今後の註解では Wissen を「あるものにとって必要不可欠なもの (本質)」などと、基本的には、ヘーゲルに特有の語彙を冗漫になっても適宜くだいて訳すことにする。そのほうが抽象的な語の連続する原文の文脈を日本語で読み解くときに理解がはかどるからである。

15 補足が長くなったが、これで冒頭の関係節から先行詞までの部分「この〔**感覺的**〕**確信の本質**をなす……**単なる存在**」は「感覺的**確信**にとって必要不可欠なものである**単なる存在**」と解することが可能になる。その内容を文にするなら「単なる存在がなければ**感覺的確信**は存在すると言えない」や「ものは存在すると言われたときのものがなければ**感覺的確信**は存在すると言えない」と記すことも可能になる。

1 この文意はまえに検討した一瞬のスナップショットに照らすだけでも充分にうなづける。「単なる存在」は具體的には「感覚器官に固有の働きによって存在が感知され確信されるもの」である。たとえば覚醒時に感知される朝の光である。その光がなければ眼は醒めない。意識は立ちあらわれない。感覚的確信はうまれない。窓からさす朝の光は意識の覚醒ないし感覚的確信の発生にとって必要不可欠なもの（本質的なもの）である。

5 それなら、「この〔感覚的〕確信の本質をなす……単なる存在」を具体的になかでとらえ、内容を文として「窓からさす朝の光は感覚的確信の本質をなす」と語ることが可能になる。「窓からさす朝の光は感覚的確信にとつて本質的なものである」と語ることでも可能である。その感覚的確信のなかに意識があらわれ、ヘーゲルの説明にそくしても、一瞬のスナップショット状態にそくしても、感覚的確信の実質をなすものがこの意識だけになるとあれば、「窓からさす朝の光は意識の本質をなす」と語ることでも可能になる。こうした文の「本質」に違和感を感ずるとするなら、それは「本質」が抽象的に言いあらわされる奥深いものであるという先入見のなせるわざであろう。ここで大切なことは、前に述べたように、そのような先入見や通念にとらわれず、ヘーゲルの設定した枠組とその枠組のなかで可能な事例にそくして考えることである。

10 そう考えたときに指摘すべきことはもつとある。すでに検討したことであるが、意識は外部からの刺激との相関で立ちあらわれる（第二段落・五五頁）という点である。事例として検討した覚醒時の場合、意識の成立にとつて必要不可欠なもの（本質的なもの）は衣類や寝具ではなく光だった。意識の方向性は衣類や寝具にはむかっておらず、どちらも意識との相関のなかになかった。それなら、右の文をより正確に言いあらわそうとすることがきり、これは「窓からさす朝の光は意識との相関において意識の本質をなす（意識にとつて必要不可欠なものである）」としなければならない。あるいは「意識にとつて必要不可欠なものはその意識との相関のなかにある

1 単なる存在（ものが存在すること）である」と記さなければならぬ。

これで最初の関係節にあらわれた「本質」は基本的に了解が可能になったと思われる。相関にあるという点は次ぎの「眞実」にもかかわっている。実際に見てみよう。

5 **第二の関係節「確信がそれ自体の眞実として言いあらわす単なる存在」**

この部分で検討すべき第一のものは「眞実」の語義である。第二段落の検討で、ヘーゲルはその語義を「現実に存在するもの」でもちいていることが明らかになっている。「眞実」が形容詞からつくられた名詞であることを考慮した場合、「確信」の第三義（八頁）のように、「確信の眞実はものの存在である」と言いあらわすことが可能であることもその検討で指摘してある。ここではその補足から検討をつづけよう。

10 前段落の検討で「現実に存在するもの」という語義をみちびきだしたとき、その語義は「認識にかかわる」（第二段落、五一頁）とことわっておいた。文の基本構造が「感覺的確信は……もつとも貧しい眞実である」となっているだけでなく、感覺的確信が *sinnlich* と限定された *Wissen* なので、この「もつとも貧しい眞実」はまずもつて *Wissen* の一形態であると受けとめるべきだからである。その場合、この「眞実」は形容詞からつくられる名詞がおびる語義のうちで、②「その状態や性質をもつことよって生まれたもの」、それもこの②が二義に分化したときの最初の意味である「〜の状態で心中に抱かれているもの」に該当する（同七頁）と受けとめるのが当然となる。

ところがここでの関係節は「確信がそれ自体の眞実として言いあらわす単なる存在」とある。したがってこの関係節における「眞実」は、*Wissen* の一形態ではなく、外界に存在するものと受けとめなければならぬ。そ

1

れならこの「真実」は②の二義に分化した二番目の意味「そのように心中に抱かれているものに対応する現実のものごと」(③で表示、「ビルディング」が具体例)に該当すると受けとめるのが当然となる。そのように受けとめるから「確信の真実はものの存在である」と言いあらわすことが可能になる。当然その「ものの存在」は右の関係節のように「単なる存在」で言いかえることができる。ヘーゲルの記した「真実」が理解しがたいとするなら、その理由は結局のところ形容詞からつくられた名詞のおびる意味の在り方が、日本語から予想できないところで展開する点にもとめることができるだろう。

5

以上から、「確信がそれ自体の真実として言いあらわす単なる存在」という関係節は、前段落の「この確信はみずから知っているものについて『それがある』としか言いあらわさない。この確信の真実はものの存在をふくむだけである」を簡潔に表現したものであることが確認できる。

10

文末の「としか言いあらわさない」が、実際には、ヘーゲルが感覚的確信になりかわって語ったものであることはもはや断るまでもあるまい。それだけではない。このとき確信の真実となる「ものの存在」ないし「単なる存在」の事例となる「朝の光」は感覚器官に固有の働きによって自動的に感知されるが、その朝の光との相関のなかで立ちあらわれる意識は、それ自体が光との相関にあることを知っているわけではない。その相関を知っているのは考察者ヘーゲルである。やはり「真実」は考察者ヘーゲルの存在とその *Begriffen* がなければ生まれようがない。これは考察者の存在をふくんで成りたつ概念である。

15

ところが「本質」のほうは必ずしもそうではない。どの文もどの語も考察者ヘーゲルの *Begriffen* の結果であるとはいっても、ものの存在は感覚的確信の認識として叙述されている。前段落から引用された右の文「この確信はみずから知っているものについて云々」は、確信の側からの言明としての叙述である。例の非論理を象徴す

る「それ（もの）」が存在するのはそれが存在するからである」は、感覺的確信——ないし確信のなかにある意識——が思考をはたらかすならこのような思考が可能であるという判定のもとに記された文である。この文のあとに「本質的なこと」が導入されたとあれば、「本質」は第一に意識の側から要請されたものとして——あるいは意識にとって必要不可欠なものとして——叙述の場に導入されたと考えなければならぬ。

「本質」も「真実」もヘーゲルの展開した文脈では同じ「単なる存在」を指示対象とする。そのかぎりではまぎらわしく見えるかもしれない。日常語で言い換えられるなら導入する必要がなかったのではないかとさえ思えるかもしれない。しかしものごとを一般的にとらえようとするかぎり、なんらかの思考上の枠組は組まなければならない。というより、ものごとが秩序だつてあらわれてくるとき、おのずからその秩序を言いあらわすための語彙が必要になってくる。

ヘーゲルが第二の思考プロセスで「本質」と「真実」を導入したとあれば、必要だつたから導入したと考えるべきである。こうした語は、文法上の用語と同じく、現象を直接に記述する語との関係ではメタ言語と呼ぶことが可能である。なぜヘーゲルがこの二語を導入したのかはまだわからないが、そうであれば以後の叙述においてヘーゲルがなぜこうした語彙を必要としたか、その違いをどのように利用するか、両語を駆使してどのような思考を展開するか等々もまた、今後の検討の対象になる。だからこうした点は今後の文脈をまっけて答をだすことにして、最初の文の後半に検討をうつすことにしよう。

最初の文の後半「よく見るなら、他にも多くのものがそのかたわらに（単なる存在とは直接的に關係する以外の

1 関わりをもたず、どのようにでも」存在している。「ことが見てとれる」

この後半は冒頭で「よく見るなら」という条件がついているが、その主語「私」を訳出していない。「私」を入れると、日本語では「他の人には見えないが」という断りが含意されかねないからである。

5 では眼をこらしてよく見たときなに見えてくるかといえは、「他にも多くのものがそのかたわらに〔単なる存在とは直接的に関係する以外の関わりをもたず、どのようにでも〕存在している」ことである。

したがって「よく見るなら」は一步ふみこんで対象を考察しようというヘーゲル自身の態勢をしめすものになる。文末の「ことが見てとれる」はこの条件に合わせて補足しただけのものなので、この後半でまず検討すべきものは「他にも多くのものがそのかたわらに〔単なる存在とは直接的に関係する以外の関わりをもたず、どのようにでも〕存在している」になる。

10

難語 beherspielen

この部分で厄介なものは「そのかたわらに……存在している」と訳した beherspielen である。この語はどの訳もほとんど一致するところがない。

15 全集訳と樫山訳はその訳語として「たわむれる」をえらび、全集訳ではさらに丸括弧のなかで原語をおぎなっている。しかしこれは——補いがあるがなからうが——意味を読みとる労を読者にゆだねたことにならう。長

一 原語は beherspielen。英訳 A では意味をこらして there is a good deal more implied。英訳 B では we see that much more is involved。仏訳では単に jouer (=play)。

1 谷川訳では「まといつく」である。文意が明瞭になるように引用すると「この確信の本質をなし、確信の真理として言明されるのが純粹な存在に限られるとして、しかし、よく目をこらすと、この純粹な存在にはいろいろとまといつくものがある」となる。牧野訳では「さらにもう一步踏みこんで考察してみると分かることは」この確信の本質を成し、この確信が自分にとつての真理だと言明している純粹存在の表面には、その純粹存在と並んで、それとは異なるものが沢山ある「ということである」となっている。この訳文中の「表面には」は、おそらく本註解で「……単なる存在には」と訳した an (英語では at や on や to などに相当する前置詞) を、「あるものの外面(表面・側面)への密着・密接・近接」を示すと受けとめた結果であろうと推測される。そのすぐ下の「並んで」は、グリムを利用して *beihet* を「nebenher (並行して)」と受けとめたのかもしれない。二冊の英訳もまた自分の理解にもとづき訳文を工夫していることは前頁の注に見られるとおりである。

10 このように訳出が個々に異なるのも原語 *beiherspielen* の意味が判然としないからである。そもそもこの語は註解者の手元にあるどの辞典にも記載されていない。グリムの大辞典にもない。前綴りをはぶいた *spielen* はきわめて日常的な動詞で、英語なら *play*、日本語なら「あそぶ」に相当する。しかし前綴り *beihet* をともなう分離動詞は、用例は存在するが、語としては現在の辞書に存在しない。

15 それでも、前綴りと動詞それぞれの意味を組みあわせるなら、基本的に分離動詞 *beiherspielen* の意味をだすことは可能なはずである。ところが前綴りの *beihet* さえほとんどの辞書には記載がない。グリムには項目として打ちだされているが、意味の説明としては、ラテン語二語による説明(実質的には言い換え)のあとに、ドイツ語による「nebenher (並行して)」と「nebenbei (そのかたわらに)」という言い換えがあり、「Herbei (こちらへ)とはまったく異なる」と注記されているだけである。これだけなら独和辞典の「そのほかに、そのかたわ

1 らに、「片手間に」という意味の提示とほとんど異なるところがない。

5 これでは考えが先に進まないのので、二要素からなる *beihen* を *bei-* と *hei-* にわけて、個別に見てみることにしよう。その場合、*bei-* には「近接・近傍」の念を、*hei-* には「運動」の念を読みとることが可能である。しかしこのように個々の基本義を確認したところで、*bei-* との組み合わせが逆になると意味がまったく変わる理由が明らかになるわけではない。問題はそれだけではない。グリムが注に記した *herbei* (こちらへ) の *hei-* には、*hin-* と対比的な「話者のほうへの運動」を読みとることができるが、*beihen-* のどの言い換えにもその念は読みとりがたい。

10 しかし言い換えのひとつである「並行して」からは、運動の念とともに、線条のものがかたわらに存在することとは読みとることが可能である。その場合 *bei-* はその線条のものにそった運動を示すことになる。ところがそれ以上のことは結びつく動詞がなければ明らかにしようがない。それなら、*beihen-* を「よく見るなら」に対応させ、現象が考察者ヘーゲルのほうに姿をあらわす、と解して運動の念を読みとることは可能かもしれない。その場合 *bei-* は「他の多くのもの」が考察者ヘーゲルにむかう運動を示すことになる。しかし文章自体は「……単なる存在には、他の多くのものがそのかたわらに」とあるのだから、直接には「単なる存在」と「他の多くのもの」の関係を述べた文に考察者ヘーゲルとの関係まで読みとつてよい理由はない。結局 *beihen-* には「近接・近傍(かたわらに・で)」の念は読みとれるが、「運動」の念は希薄であり、前者の念が優位にある、と受けとめる以外にない。

15 では「かたわらに・で *spielen* する (*beiherspielen*)」とはどのような動きなのか。英語なら *play* で、日本語なら「あそぶ」で理解できる動詞がなぜこの文脈でえらばれたのか。

1

この文脈で *spielen* をそのまま「あそぶ」と訳したのでは、文脈の意味が不明になる。まさか子どもが砂場であそぶように「単なる存在のかたわらには他にも多くのものがあそんでいる」というわけではあるまい。「たわむれる」も、「あそびたわむれる」と重ねて言い慣わすように、「あそぶ」とのあいだに大きな意味の差があるわけではなく、不適切である。ではこの *spielen* はどのような動きとして受けとめるべきなのか。

5

このように見てくると *beiherspielen* という動詞は既存の翻訳書が訳出に苦労したことをしのばせるに充分なほど厄介であることがわかる。しかしまったく手がかりがないわけではない。対比項との関係で考えることである。ドイツ語の *spielen*、英語の *play*、日本語の「あそぶ」、この日常的な三語をもっとも基本的なレベルでとらえるなら、どれも「仕事」との対比でとらえることができる。この対比で考えるとき、この三語は「生活や集団的秩序の維持に不可欠な活動にかかわらない」という点で共通することがわかる。

10

そうした活動を「主」と捉えるなら、*spielen* や *play* や「あそぶ」という活動は「従」である。ヘーゲルの展開した文脈で「主」となるのは「ものが存在すること」である。「存在」を「活動」と呼ぶことは不適切であるが、これが第二段落の結論であり、その結論をうけ、表現を変えて第三段落の冒頭に「単なる存在」が提示されるからである。当然、「従」は「他の多くのもの」の活動である。

15

それなら、「他の多くのもの」は「主」である「単なる存在」のかたわらに、その「単なる存在」とは直接的に関係する以外の関わりをもたず、どのようにでも存在している、動いていようが静止していようが、その動きは「単なる存在」にとってなんの関わりもない、これが *beiherspielen* の実質の意味になろう。第一のまとまりを提示したとき「そのかたわらに「単なる存在と直接的に関係する以外の関わりをもたず、どのようにでも」存

1 在している」と訳出したのは、以上の点を考慮した結果である。

では「そのかたわらに存在している」という「他の多くのもの」は具体的になんなのか。

5 この点は——これまでのように Sinn ないし sinnlich が「見る聞くなど感覚器官に固有の働き」に限定されていると見なして検討するかぎり——ヘーゲルが Auffassen のはたらいっていない段階にある Wissen を感覚的確信と呼んでおり、それが Wissen にたいするしぼりになるという検討結果（第二段落六八頁）を思い起こせば、すぐ見当がつく。このしぼりを解いたら、感覚器官に固有の働きだけでなく、他のもろもろの認識能力がはたきだし、経験世界の無数のものが一挙に立ちあらわれてくる。当然、順序立てて語らなければ、叙述が支離滅裂になる。どのような語彙を駆使し、どのような順序で語るかに、著者の認識と思索の深さがあらわれるとさえ言える難題である。「他の多くのもの」の導入と処理はその初手になる。

10 Beispiel（実際にかたわらに存在する直接態のひとつ）

その初手は、実は、beherspielen を記すことからはじまっている。そうであることがわかるのは「現実的な感覚的確信は、単にこの〔前段落で述べた〕単なる直接態であるだけでなく、〔実際に単なる存在のかたわらに、その単なる存在とは直接的に関係する以外の関わりをもたず、どのようにでも存在する〕直接態のひとつでもあ

15 一 beherspielen をこのようにとらえることが可能なら、「単なる存在には」と「には」で訳したを「表面には」と受けとめる必要はなくなる。spielen する場を「そのかたわらに」と訳してあるのだから、目には「単に（点として意識される）空間的な場」を示すと受けとめるだけでよい。

1 「る」という二番目の文によってである。だからこの文と最初の文との関係をふくめて簡略的に記そう。核心となる語を原語で記して、その語の理解が鍵であることがわかるようにするなら、「感覚的確信との関係で見られた単なる存在のかたわらには、他にも多くのものが存在している。現実的な感覚的確信は単に直接的に存在するもの（直接態）であるだけでなく、その直接態の ein Beispiel でもある」となる。

5 このふたつの文は最後の「その直接態の ein Beispiel でもある」でつながれていると読める。Beispiel は beiherspielen に対応する名詞になりえるからである。しかし両者の接続関係を示すはずのこの部分を一読しただけでは、うまく意味がとれない。右のように敷衍することが可能なら、「直接態の ein Beispiel」は、「単なる存在のかたわらに存在する他の多くの直接的なものひとつ」という意味になるのであろう。しかしこれだけでは Beispiel を「他の多くの直接的なものひとつ」と言いあらわす理由がはっきりとはわからない。この疑問を念頭に二番目の文を検討してゆこう。

10 前半の主要部分をなす「……直接態である」までは——冒頭の「現実的な」をのぞくなら——すでに既知の内容であり、なんのこともない。これまでの検討から要点をかいつまんで再録することでその説明に代えることにする。

15 第一段落の冒頭で提示された Wissen は直接的な知であり、その Wissen に Begreifen はまったく作用していない。だからこれは直接的に考察者ヘーゲルの対象となる。当然、その Wissen を sinnlich と限定したところで成りたつ感覚的確信も直接的に存在するものである。この「直接的に存在するもの」をヘーゲルは「直接態」とも呼ぶ。だから「感覚的確信は、この〔前段落で述べた〕単なる直接態である」に新たな内容はふくまれていない。ではなぜ「……だけでなく」という付加があるのか。なぜ「現実的な」という限定があるのか。

1 すでに前々頁で「経験世界の無数のものが云々」と述べておいたように、感覚的確信については、あるいはここで感覚的確信と限定されている生身の人間の Wissen については、語るべきことが数限りなくある。ところが「感覚的確信は単に直接的に存在するもの（直接態）である」と言っただけでは、感覚的確信の現実における在り方をひとつ言いあらわしたにすぎず、これだけでは、それ以外のことについてヘーゲルがなにを考え、なにを知っているのか、皆目わからない。そもそも現実のなかに生きる人間が生涯を過ごす過程で経験する多層層のものごとについて、そしてまたその意味について、「序に代えて」で述べた外部と現実のずれについて、幾重にもつづく変貌のプロセスについて、ヘーゲルはまだなにもひとつ説明していない。ヘーゲルはまず「……だけでなく」とつけ加えざるをえない。これが付加の根本理由である。当然、ヘーゲルは自分が「感覚的確信」と呼ぶものをさらに説明しなければならない。

10 そのときに「現実的な」をつけ加えたということは、ヘーゲルがあくまでも現実に存在する感覚的確信について語ろうとしていることを示唆する。しかし「現実的な感覚的確信は……」と語るときにヘーゲルの考える「現実」が、卑近な日常のなかにある人間の理解する「現実」と同一なのかどうか。これは一度たしかめておかなければなるまい。

15 この「現実的な」の原語は *wirklich* である。この語は動詞 *wirken*（作用する）から生まれた形容詞で、「作用のなかにある・作用をうけている（状態にある）」が基本義である。この基本義をもつ *wirklich* が日本語で「現実的な」という意味をもつとあれば、当然その「作用」の生じる場が「現実」と呼ばれると受けとめなければならぬ。*wirklich* の語義に照らすなら、物理的な作用であろうと心的な作用であろうと、作用の性質の如何を問わず、その「作用」の生じる場が「現実」ということになる。しかもその現実が生身の人間の生活する現実の世

1 界と同一でなければ、これまでの感覚的確信に坎する考察は意味をもつまい。ヘーゲルの文章がどれほど晦渋であつても、ヘーゲルの生きる現実が他の人々の生きる現実と別のところにあると考える必要は毛頭ない。またそう考えるべきでもない。この現実の受けとめ方自体は年齢や教養や慣習や民族性や身体的特性などの違いにおうじて多種多様であるだろうが、意識があり外界のものが感知されているというだけの現段階でその多様性を考慮する必要はない。したがつて「現実的な感覚的確信」は「多数の人々が生きる現実のなかに存在する感覚的確信」の意で受けとめてよい。

5 ではなくその「現実的な感覚的確信」が原文で不定冠詞をともなつて記されているのか。

10 へーゲルはこれまで感覚的確信を種々に説明してきたが、第二段落までのへーゲルの説明で明らかになつたことは、基本的に、感覚的確信が存在しているということにすぎない。それが経験世界のどこにどのように存在しているのか、その世界に存在する他の無数のものごととどのような関係にあるのか、このようなことはまだまったく不明である。

へーゲルはやはり現実に存在する感覚的確信をさらに説明せざるをえないわけであるが、その説明が必要になつた文脈で「現実的な感覚的確信」が不定冠詞をともなつて提示されたということは、へーゲルが感覚的確信を新たに説明する必要があると感じ、実際に新たに説明したことを意味する。

15 欧米語では——日本語にない考え方であるが——新たに考察対象を説明する必要を感じたとき、不定冠詞を利用してその対象を「これこれと呼ばれるものひとつ」としてあらためて文脈のなかに導入する。この導入の仕方には、当然のことながら、「読み手は考察対象がこれこれと呼ばれるものであることはわかっているが、それ以上のことは、読み手が知つていようといまいと、その理解の如何にかかわらず、これからあらためて自分が説

1 明する」という断りがふくまれる。

5 へーゲルは、第二段落までに語った内容を整理し（その内容を簡潔に関係節で示し）、次いで不定冠詞にともなうこの考え方と言語慣習にそくして、感覺的確信という名称とその基本的な内容を（もつとも貧しい真実であるなどを）叙述の場では既知のものと前提し、「私が感覺的確信と呼び、現実に存在するそのひとつは」、とあらためて現実におけるその存在から感覺的確信を提示したのである。

10 当然その含意は「現実に存在する感覺的確信と言えるものの（任意の）ひとつは、（だからそのどれでも）」となる。この含意も訳文にだすなら、前半の節は「現実に存在する感覺的確信と言えるものの（任意の）ひとつは（だからそのどれでも）、前段落で述べた単に直接的に存在するもの、つまり私の思考活動である *Begreifen* がまったく作用していないという意味で直接的に存在するもの（直接態）であるだけでなく」となる。

15 へーゲルは前段落で説明した「直接態」の概念も利用して、内容の一貫した連関をたもちながら、叙述の場にあらためて「感覺的確信」を導入し、新たに説明しようとする。「よく見るなら」はへーゲルが第三の思考プロセスをはじめたことを告げる合図だったのである。

20 しかし、読み手にとって大切なのは、このあとがどう続くかである。その続き方によってへーゲルがなにをどのように説明しようとしているかがわかるからである。ところがそこでへーゲルがまず指摘すべきこととして導入したのは「（その直接態の）*ein Beispiel* でもある」である。

25 へーゲルの進む方向にたいする手がかりが得られると予想していたところで、一読しただけでは意味のとれない文があらわれる。この文で意味の把握に障害となるのは *Beispiel* である。この語をふくむ部分はこれまで文として訳していたが、原文では *sondern ein Beispiel derselben* であり、*Beispiel* を中心とした句である。

1 この Beispiel は英語の example に相当し、日本語ではよく「実例」などで訳される。全集訳でも「この直接態の実例 Beispiel でもある」と「実例」をもちいる。ただ、それだけではなく、注で「……beiherspielen という表現があることで明らかのように、ここで Beispiel は実例という意味をもつだけでなく、byplay (ベイリーの英訳) ということをも意味する」と補足する。他の訳も、注はつけないが、「この直接態が傍らにたわむれていること(実例)でもある」(櫻山訳)、「それがさまざまな実例を浮かびあがらせるのだ」(長谷川訳)、「この直接性の一具体例「だということ」である」(牧野訳)と、単に訳語に「実例」やそれに類する語をもちいるだけでなく、訳文にそれぞれ工夫をこらす。「実例」と訳しただけでは落ち着かないから、それぞれ工夫をこらしたのであろう。しかしなんの実例なのかが、以上の訳では判然としない。

10 この Beispiel は、全集訳の注にあるように、たしかに beiherspielen との関連で理解するべきであろうし、そのように理解することで前綴りにふくまれる her- に実質的な意味が読みとれなかったことも理解できるようになる。それだけでなく、ここでは「現実的な」の付加に呼応して不定冠詞の存在が Beispiel の現実における存在を含蓄する点も考慮する必要がある。不定冠詞の基本義は——すでに述べたように——「〜と呼ばれる(現実のもの)のひとつ」だからである。第一のまとまりを提示するときには、以上を念頭において、Beispiel をふくむ句を「[実際に単なる存在のかたわりに、その単なる存在とは直接的に関係する以外の関わりをもたず、どのようにでも存在する]直接態のひとつでもある。」と訳しておいたのである。

15 しかしこのように訳しても、なぜ「直接態のひとつ」と言いあらわさなければならぬのかは依然としてわからない。だから——Beispiel の訳語は「実例」として——「その直接態」と訳した derselben にいったん検討をめぐすことにしよう。

この *derselben* は指示代名詞（の二格、英語の所有格）である。用法から見てこの *derselben* が「現実的な感覚的確信は単なる直接態であるだけでなく」と訳した「直接態」を受けることはまちがいない。しかし一度「直接態である」と述べたあとに、なぜもう一度わざわざ「その（その直接態の）実例である」と述べなければならぬのか。

その理由はまだわからない。しかし「その直接態の実例」とあるのだから、ヘーゲルが「直接態」と呼ぶものは他にも存在するはずである。どれだけの数があるかわからないが、それなりの数で存在する直接態が実際に存在しなければ、「実例」という言い方が成り立たない。

それなりの数で存在する直接態になり得るものとしてこの文脈で挙げられるのは、最初の文で「単なる存在のかたわらには、他にも多くのものが存在している」と述べられていた「他の多くのもの」である。ヘーゲルはただ *Auffassen* も *Begreifen* もはたらいえない状態を設定して考えていると見なして検討しているのだから、存在するものはどれも直接的に存在すると受けとめなければならないからである。

しかしその意味では、そもそもこの考察の場にあらわれているものすべてが、直接態である。第一段落との関連で見ると、この「他の多くのもの」は「直接的なもの」ないし「存在するもの」に該当する。どちらの呼称であれ、ヘーゲルが *Wissen* の対象として第一段落で外界に存在すると述べたものは、ここで直接態と呼ぶものになる。

それだけではない。すでに第二段落で、結論を打ちだしたあと、ヘーゲルが「関係としても、確信は直接的な関係である」と述べていたように、すべての直接態の個々の関係も直接的であり、したがってそのどれもが「単なる存在のかたわらに（単なる存在とは直接的な関係以外の関わりをもたず、どのようによも）存在する」と受

1 けとめなければならぬ。当然、感覺的確信と単なる存在との関係も直接的になる。

それなら第一のまとまりの全体は——文意をとりやすくするために亀甲括弧などを外して記すと——「しかしこの感覺的確信にとって不可欠なもの（本質）をなし、確信がそれ自体の実質（真実）として言いあらわすもの存在（単なる存在）には、よく見るなら、他にも多くのものがそのかたわらに、それと直接的に関係する以外の関わりをもたず、どのようにでも存在していることが見てとれる。現実的な感覺的確信は、前段落で述べた単なる直接態であるだけでなく、このように単なる存在のかたわらに、その単なる存在とは直接的に関係する以外の関わりをもたず、どのようにでも存在する直接態のひとつでもある」となる。

このように記すなら、この第一のまとまりで新たに導入された事柄が、最後の部分だけであることはうたがいがようもない。ヘーゲルは、*Beierspielen* と *Beispiel* を、語の構成要素からなる文字どおりの意味を利用し、感覺的確信が「単なる存在のかたわらに、その単なる存在とは直接的に関係する以外の関わりをもたず、どのようにでも存在する直接態のひとつである」という認識を新たに導入したのである。あるいはその認識を明示したのである。

ここまでくれば訳の一致しなかった *Beierspielen* の語義を「あるもののかたわらに、それと直接的に関係する以外の関わりをもたず、どのようにでも存在する」と定めることができる。当然、*Beispiel* は、それに対応して、「あるもののかたわらに、それと直接的に関係する以外の関わりをもたず、どのようにでも存在する直接態のひとつ」という意味になる。欧米語の単語を常に漢語ひとつで翻訳しようとすること自体がはなだしい無理をおかしているのである。

これで *Beispiel* を「実例」と訳す必要がないことも明らかである。実例は具体例でもある。ところがここで

1 は具体例と言えるものにとまなう具体的イメージがまったたく浮かばない。これでは実例と呼びがたい。次の段落を見ると、この語は用語化されていると読める。しかしここでは不定冠詞の導入が大きな意味をになっているので、訳語には冗長をためらわず「単なる存在のかたわらにどのようにも存在する直接的なもの」をえらぼう。

5 この語義から確認できることがもうひとつある。それはヘーゲルが感覺的確信を単なる存在のかたわらにどのようにも存在する直接的なものひとつとして提示した点にかかわる。「個別の人」と「個別のもの」と言いあらわされたときは対等の関係にあったが、ここで感覺的確信は「他にも数多く存在するもののひとつ」へと格下げされる。この提示の仕方は、ものは存在すると言われる「もの」の存在は不可欠であるが、感覺的確信のほうはあってもなくてもよい副次的なもので自立性をもたない、ということを示唆する。

10 したがってこのように感覺的確信を提示することは、感覺的確信に生まれる「自分」が自存する根拠をもたないことをも示唆する。この捉え方は感覺器官に固有の働きによって感知され確信された「単なる存在」に重点をおいていなければ成りたない。これは「単なる存在」とそれを感知する「意識」ないし「感覺的確信」との関係を、「単に直接的にするもの（単なる存在）」が必要不可欠なもの（本質）であり実際に存在するもの（真実）であるという見方からながめたときに可能な叙述である。

15 この視点は第二段落の結論である「それ（もの）は存在する」から生まれるべくして生まれたものでもあるだろう。それに加えて、このようにヘーゲルの文章を砕くなら、ここでヘーゲルが「単なる存在のかたわらに、その単なる存在とは直接的に関係する以外の関わりをもたず、どのようにも存在する直接態」という捉え方から外界に視線をむけ、その視野のなかに「他にも存在する多くのもの」を入れているのだろうと推定することが可能になる。そう推定することで、次のまとまりの冒頭に「そのときに立ちあらわれてくる無数の異なるもの」が

1 記されていることも了解できるものになる。第二のまとまりに移ろう。

二 第二のまとまり

5 まずこのまとまりを訳そう。——「その際に〔よく見たときに〕立ちあらわれてくる無数の異なるもの〔無数のものごと〕のもとに、私はいたるところで基本的に異なる〔相對するふたつの〕ものを見いだす。つまり、感覺的確信においては、すぐさま単なる存在から、すでに名をあげたふたつのこのもの——自分としてのこの人と対象としてのこのもの——が〔単なる存在からはなれ、たがいに直接的に關係する以外の関わりをもたずに、私の視野のなかに〕落ちてくる〔あらわれてくる〕。——最後の「落ちてくる」がなんともぎこちないが、訳は一応これでよいとしよう。問題は文意のほうである。それがどうも明瞭ではない。

10

第一の文——「その際」「異なるもの」「見いだす」

15 問題の少ない単純な語句から処理しよう。まず「その際に」である。これは右で亀甲括弧のなかに「よく見たときに」とおぎなつたが、「他にも多くのものがそのかたわらに存在していることを見てとつたとき」としても一向にさし支えない。そう記さなかつたのは、内容が部分的にヘーゲルの記した語句とかさなり冗長になるからである。次は「無数の異なるもの」である。これがすでに述べた「經驗世界の無数のものごと」（二十頁）に対応することは容易に見てとれる。Wissenにたいするしほりを解いたとき、もろもろの認識能力がはたらきだして一挙に立ちあらわれてくる無数のものごとである。

ここで「異なるもの」と訳した語は *Unterschied* である。現実の「無数のものごと」に対応させるためにこの

ように訳したが、語自体としては「違い」と訳すことも可能であり、既訳では「区別」をもちいる。用語としても「区別」で確立しているようである。その「区別」をもちいるなら、これはここで複数形だから、無数の「区別あるもの」と訳すべきであろう。しかしここで「区別」をもちいると、何と何の区別なのか、なぜここで急に区別を問題にしなければならないのかがわからず、唐突な感をまねきかねない。それであまり違和感をあたえない「異なるもの」を訳語にえらんだだけである。「無数の区別あるもの」と訳すなら、「たがいに異なり」と語句をおぎない、「たがいに異なり区別ある無数のものごと」と続ければよいであろう。

ここで文意をとらえがたくしているのは、むしろ、「私はいたるところで基本的に異なるものを見いだす」とある主節のほうである。ヘーゲルが「見いだす」対象として記したのは「基本的に異なるもの」であり、これは一語 (Hauptverschiedenheit) で示されているが、具体的には次にくる「この人」と「このもの」である。すでに第二段落でヘーゲルが名を挙げて叙述した二者である。それにもかかわらずヘーゲルは、まるで初めて見つけたかのように、「見いだす (finden)」と記す。一読したときにどうしても奇異な感をうける。

しかし、感覺的確信が不定冠詞をともなつて導入されたことを想い起こすなら、この語は疑問とするに当たらない。ヘーゲルは感覺的確信を「そう呼ばれるもののひとつ」としてあらためて文脈のなかに導入したのだから、

一 Haupt は名詞で「頭 (head)」の雅語。接頭語としては「主な・主要な・最大の・最高の」の意。「この人」と「このもの」が第二段落から考察の焦点にあるからの付加であろう。既訳は「主要な」等をもちいるが、どの訳語でも直覺的に意味がとらえられるわけではない。補いは必要である。「無数の」異なるもの」との違いは verschieden と unterschieden の違いになる。この文脈はその相違に触れる必要がない。英訳はどちらも difference、仏訳は difference。

1
その感覚的確信のもとにあると見なす「この人」と「このもの」も、あらためて考察の場に導入する体裁をとらざるをえない。だから、「すでに名をあげた(名づけた)」と言いながら、他方でそれを「見いだす」と述べたのである。

5
見いだされた当の「基本的に異なるもの」は、相対しているかぎり、どれでもよいはずである。不定冠詞のついた感覚的確信は任意のひとつだから、当然その本質をなす「単なる存在」も任意のものである。感覚器官に固有の働きによって感知され確信されるものは、感知されるかぎりなんでもよい。そして感知される可能性のあるものはどこにでもある。それは「いたるところに」ある。

このように最初の文にはそれほど理解に障害となる語句はない。しかし次の文は必ずしもそうではない。文を構成する基本的な語句に疑問が生じる。

10

第二の文——「単なる存在から……落ちてくる」

その疑問は、なぜヘーゲルはこの人とこのものの二者が「単なる存在から……落ちてくる」と記したのか、である。この「から」は空間内の起点を示す表現と受けとめるべきであろうが、なぜヘーゲルは「単なる存在」をこの人とこのものが出てくる起点として表現したのか。最後の「落ちてくる」も奇異である。見いだすべきものがすでに述べてある「この人」と「このもの」であることは明白なのだから、単に「それはこの人とこのものである」と記すだけでもよかつたのではないか。

このように問うことはヘーゲルがなぜ「落ちてくる」と述べたのかを問うことを意味する。

その原語は *herausfallen* で、これは *heraus-* と *fallen* から成る。前綴りは文字どおりには「向こう側にあるも

1 のの内から外のこちら側へ」の意である。この文脈では、当然のことながら、「単なる存在から考察者であるヘーゲルのほうへ」という運動をともなつた位置関係を示す。訳文に「私の視野のなかに」をおぎなつたのはそのためである。

5 他方 fallen は英語の fall や日本語の「落ちる」に相当する。これはたとえば石の落下にもちいられるが、葉が樹木から落ちるように、あてどなく落ちる動作にも適用できる。どちらであれ、これは意志をともなわずに生じる動作を意味し、この文脈では単なる存在から離れて「あらわれる」という動きを示すだけである。

10 この fallen で大切なものは、実際の動作がどうであるかより、この語が文脈でおびる含みである。意志がとまなれば目的や目標など対象への関係が動作に生まれるが、それが無いのだから、この fallen は「あてどなく落ちる」の意をおびざるをえない。したがってこの動詞は、beherspielen と同じく、「たがいに直接的に関係する以外の関わりをもたず」という状態を指すもうひとつの表現であり、この含みを示すために導入されたと考えなければならぬ。どちらも——beherspielen & herausspielen も——「直接的に」存在するものが実際に存在する在り方を、哲学的な著作のなかで簡潔に言いあらわそうとして工夫された比喩なのである。

15 そうであれば「単なる存在から……この人と対象としてのこのものが……落ちてくる」は、「単なる存在からこの人とこのものが「たがいに直接的に関係する以外の関わりをもたず」あらわれる」と記してもならさし支えない。しかもその意味は——直接的な関係云々を除外するなら——「基本的に異なるものをいたるところに見いだす」と実質的に変わりが無い。より具体的に記すなら「私は基本的に異なるものがいたるところに存在することをあらためて確認する」が真意ということになる。

その「いたるところに」あるものがすべて直接的なものであり、その関係も直接的であるとあれば、この段階

1 では、「単なる存在」と直接的に関係する以外の関わりをもたないものが「感覚的確信」であろうと「意識」であろうと「自分」であろうと、どれも実質的には違いがない。「単なる存在」が「感覚的確信」との関係でとらえられようと、それが「このもの」と呼ばれて「この人」との関係でとらえられようと、それも大きな意味をもたない。

5 それなら、ここまでの内容の要点を第一段落の内容もふくめてわかりやすく書きあらわすなら、「ヘーゲルは経験世界の無数のものごとを視野に入れ、感覚器官に固有の働きによって感知され確信されたものを『存在するもの』と呼び、それを自分自身にとつては直接的なものであることとわる。その『存在するもの』をこの段落では『単なる存在』と呼びかえ、その『単なる存在』が直接的に関係する以外の関わりをもたない感知主体と対になっていることに着目し、その対をすでに示した呼称である「このもの」と「この人」でもって考察の場に入れた」と記すことができる。

10 このように記すなら「単なる存在から」は強いてそう記さなければならぬものではないことがわかる。これは述語を「落ちてくる」としたために必要とされた語でしかない。

15 内容を整理しよう。このまとめはすでに前段落で提示されていた「この人」と「このもの」が、あらためて提示した感覚的確信のところにも存在することを述べながら、前者が後者の「かたわらに、それと直接的に関係する以外の関わりをもたず、どのようにも存在する」という点をあらためて確認するために記されたものである。

ここで「この人」と「このもの」は、感覚的確信が単なる存在との関係で格下げされたのと異なり、まだ等値関係におかれている。その等値関係は *beiherspielen* と *Beispiel* が前提となつたもたれている。これまでの内

1 容の核となるものがこの両語に描写されていたことは明らかである。当然、これに続く考察の対象は「直接的に
関係する以外の関わりをもたず、どのようにでも存在する」という在り方になるはずである。

5 その状態を日常語で言いあらわすなら、感知された個々のものはバラバラに、なんの関連も秩序もなく存在し
ている、ということになる。 「存在するもの」や「直接的なもの」や「単なる存在」と呼ばれたものも、全体
としてそのような状態にある。これはつまり、ヘーゲルが現実のものごととその理解をこの段階にあるものとし
て捉え叙述している、ということである。生活のなかでは、身近なものでさえ、それなりの関連や秩序をもつて
いる。このままで済むわけではない。

10 では、そうした外界のものの任意のひとつである「このもの」と、それを意識する「この人」のあいだに、ヘ
ーゲルはさらにどのような関係を読みとろうとするのか。次のまとまりに眼をむけよう。

三 第三のまとまり

15 このまとまりに厄介な語句はないので、すぐ訳出しよう。——「私がこの区別をふり返って考察すると、この
人とこのものを導きだしたプロセスをもう一度見なおすと、感覚的確信においては、一方も他方も、単に直接
的に存在するだけでなく、同時に媒介されたものとしても存在することがはつきりする。自分是他方のもの、つ
まりものを介して、確信をもっており、もののほうも確信においては同じく他方のもの、つまり自分を介して存在
する。」——

このまとまりは「私がこの相違をふり返って考察すると」からはじまる。ふり返ることがそれ以降に述べる内
容が見えてくる条件になっている。つまりこの書き方は読者もみずからふり返らなければ内容が見えてこないこ

1 とを合意する。しかしそれはさほど面倒なことではない。この人とこのものを導きだしたプロセスをもう一度見なおすだけでよい。

5 ヘーゲルが見なおした結果の中心は「媒介」にある。具体的には「一方も他方も、単に直接的に存在するだけでなく、同時に媒介されたものとして存在する」である。ヘーゲルはものの在り方を「直接的」と「媒介されている」の二者択一で考える。「直接的」の原語を構成要素にそくして訳すなら「無媒介の」と訳されるのだから、ヘーゲルは第一段落冒頭の文を記すときから、すでに媒介・無媒介の対でものごとの在り方を考えていたのである。

10 しかしこの対も検討してみなければならぬ。それも具体例をもちいて具体的に考えないと足をすくわれかねない。だからここでは「あれっていけないんだよねえ」と語った幼稚園児が砂場であそんでおり、それを母親が見まもっていると仮定して、この対の在り方を考えてみよう。

園児が砂場であそんでいる。砂で船をつくるのに夢中になっている。その姿をながめている母親は自分の子どもが無心にあそんでいると見てとるかもしれない。このようなときによくもちいられる「無心」には、おそらくだれも違和感をいだかないであろう。日本語の言いまわしとしてきわめて自然である。

15 しかしその「無心」は母親から見るとの判断である。子ども自身は船を造るのに夢中である。舳先はどんな形にしようか、船橋をどうしようか等と考えながら船を造っている。子どもは自分が無心であそんでいることを知らない。無心ということも知らない。それを知っているのはながめている母親である。あるいはそれに準じる年齢の者である。

では、夢中になって砂いじりをしている園児を、ヘーゲルの語彙をもちいて記述するとどうなるのか。

1 子どもはしきりに Auffassen をはたらかせながら砂いじりしている、ということになる。船を造ることに夢中の子どもの意識は砂と船にむいており、そのように砂いじりしている自分に Auffassen をむけていないのはまぢがいない。したがって、砂と船にはたっぷり Auffassen を適用しているから——砂いじりする自分に意識がむいていないとはいえ——園児は砂にも船にも「直接的に」相対しているわけではまったくない。

5 では子どもは砂いじりする自分にたいして「直接的」なのかと言えば、これもそうは言えない。ただ別の理由からである。幼稚園児は砂いじりに夢中になっている自分に直接的に相対する（自分をながめる）自分ないし意識が存在しないから夢中になれているのであり、「直接的に」と捉える主体が存在しない。「邪念がない」という意味での「無心」は、この状況では、「自分をながめる自分ないし意識」がないの意である。「無心」も「直接的」もあそぶ子どもをながめる母親の立場から可能な判断である。

10 その母親はもう無心になれない。母親は生活のなかで処理しなければならぬあれこれのものを考慮しながら子どもの遊びを見ている。母親は子どものあそぶ姿を他の多くのものごとを介して——媒介的に——自分の子どもが「無心に」あそんでいると見てとる。

15 「直接的」も「媒介的」も適用される当の幼稚園児の在り方から可能な語ではないのである。この二語は園児をながめる者にして初めて可能な語である。ヘーゲルの展開した文脈で、幼稚園児は対象にすえられた生身の人間に相当する。母親はヘーゲルに相当する。したがってヘーゲルの述べる「一方も他方も、単に直接的に存在するだけでなく、同時に媒介されたものとして存在する」は、ながめる者・観察者・考察者にとつて意味ある文である。この文が適用される当の対象はまだこの語彙のとどかないところに存在している。

ヘーゲルはこの難題をどのように解決するのか。

1 この疑問を念頭においてヘーゲルの展開した文脈にもどろう。つまり「一方も他方も、単に直接的に存在するだけでなく、同時に媒介されたものとして存在する」にもどろう。

5 この文でヘーゲルは、「この人」はものによって、「このもの」は自分によって、媒介されていると述べる。たしかに、一瞬のスナップショット状態に照らしても明らかのように、感知される外界のものがなければ、意識は生まれようがない。「この人」つまり「自分」が「ものを介して確信をもっている」ことはうたがない。「このもの」も、「自分」がなければ、その存在さえ確認されないのだから、「もののほうも同じく確信においては他方のもの、つまり自分を介して存在している」ことにまちがいない。

10 しかしその両者が「媒介されている」と捉えるのはあいかわらず考察者ヘーゲルである。外界のものが感知されることで考察の場にすえられたことはまちがいない。しかし感知し存在を確信することは感覚器官に固有の働きであり、外界のもののおぼろげな知らぬことである。「このもの」がふり返って「この人」に媒介されていると知るわけではない。感知する「自分」や「意識」がふり返ったわけでもない。感覚的確信もふり返らない。意志がはたらいっていないのだから、そのどれにもふり返ってそれ自体が媒介されていると知る力はない。

15 要するに考察の場にすえられた「このもの」も「この人」も媒介の関係にあることを知らない。それを知るのは考察者ヘーゲルだけである。ふり返ったのはあくまでも「私」であるヘーゲルであり、そのヘーゲルがふり返って両者は媒介されていると認識したのである。

ところがヘーゲルは必ずしもそうは考えていないようである。次段落の内容を見てみよう。

四 第四段落

1

この段落は、感覺的確信が単なる存在と直接的に関係する以外の関わりをもたず、どのようにでも存在する直接態のひとつである、つまり結局は周囲のものごとくに触発されて生まれる意識は存在する根拠を自分のなかにもつていない、という内容を承けて展開される。この段落は一挙に訳そう。全体を一望できるようにするためである。ただ、いくぶん長いので、まず既訳の語彙を利用して訳出する。

5

——「この、本質と実例の区別、直接態と媒介態の区別は、単に私がつけるだけではない。私はこの区別を感覺的確信それ自体のもとに見いだす。そしてこの区別は、私がたったいま規定したようにではなく、それ〔感覺的確信〕のもとにある形で受けとめなければならぬ。一方〔単なる存在〕はその〔感覺的確信の、あるいは感覺的確信を認識の領域とした場の〕なかで単に直接的に存在するもの、ないし本質として措定される。これが対象である。だが他方〔認識する主体〕は非本質的に媒介されたものとして措定される。これはその〔感覺的確信を認識領域とした場の〕なかで、それ自体として存在するのではなく、他のものを介して存在する。これが自分であり知、(ein Wissen) である。この知はそれ〔対象・単なる存在〕が存在するから対象を知るだけであり、存在することも存在しないこともあり得る。だが対象は存在する。これは真なるものであり本質である。これは知られる知られないに関わりなく存在する。これは知られないときにも存続する。だが知は対象が存在しないときには存在しない。」——

10

以上は内容の点から三分することができる。第一のまとめりは冒頭から三行目なかばの「……受けとめなければならぬ」までである。その内容をわかりやすく砕くことから検討をはじめよう。

15

第一のまとめり——感覺的確信それ自体のもとに見いだされる区別

1

このまとまりを生身の人間にそくして碎くならおおむね次のようになる。——ものは存在すると言われたときの「もの」は感覺的確信の存在にとつて必要不可欠である。感覺的確信は外界のものを感知することで成りたつからである。そのようにして成りたつ感覺的確信は直接的なものでもあり、外界のもののかたわらにどのような存在する直接的なものひとつでしかない。単なる存在と感覺的確信とのあいだには、このように明らかに區別がある。他方で、ものの在り方には、直接的な在り方と媒介された在り方があるが、この双方のあいだにも明らかに區別がある。この區別は、私がたつたいま規定したようにはなく、感覺的確信のもとにある形で受けとめなければならぬ。——

5

これでヘーゲルがこれまでの内容を手短にまとめたうえで「感覺的確信のもとにある形で受けとめなければならぬ」を打ちだしたことは充分に読みとれるであろう。既訳を利用して訳した冒頭の「本質と実例」による區別は前段落までの内容を集約的にまとめられたものである。このようにまとめることはヘーゲルが自分の考えを一歩まえに進めたことを含意する。次の「直接態と媒介態の區別」は単なる存在と感覺的確信（ないしこのものところの人）がたがいに媒介されていると認識した結果うまれた區別である。第二段落までの考察では単なる存在も感覺的確信も「直接態」としてとらえられていたが、第三段落からは両者とも同時に「媒介態」としてとらえられることになったわけである。

10

15 以上をヘーゲルの把握として既訳の語彙をもちいて図式的に整理するなら、第一段階が「単なる存在と感覺的確信（このものところの人）」、第二段階は「本質と実例」、そして第三段階が「直接態と媒介態」となる。第二段落の結論である「ものは存在する」に判断が次々に積みかさねられてきた結果が、ここで「直接態と媒介態」の把握にいたったことになる。

1

最後の「直接態と媒介態」の区別で興味深く、また留意しなければならないのは、ヘーゲルが最後に打ちだした「単に私がつけるだけではない」である。「本質と実例」の区別も「直接態と媒介態」の区別も「私がつける」(區別する)ことは、たしかに、これまでの検討にも合致し、そのまま率直に肯定できる。しかしその区別がほんとうに「感覺的確信それ自体のもとに」もあるのかどうか。

5

「もとに」とあるのだから「區別」は感覺的確信のところにもあると受けとめなければならない。見いだす主体がヘーゲルであることは言うまでもない。區別をつける (machen/英語で make) のも見いだす (finden/英語で find) のもヘーゲルであり、双方とも考察者ヘーゲルの行為である。そして——ヘーゲルの叙述にそくして考えるかぎり——前者はヘーゲルが感覺的確信の外から感覺的確信にみとめた(つけた)區別であり、後者は感覺的確信のもとに、元々あった區別であることになる。いずれの場合でも、感覺的確信はヘーゲルの考えとは無縁にもヘーゲルの外に存在する、とヘーゲルが叙述している。そう受けとめなければこの文脈が意味をなさない。では、感覺的確信はほんとうに経験世界のなかに、考察者ヘーゲルの外に存在するのかわるか。

10

ヘーゲルの考える感覺的確信

これまでの検討に照らすかぎり、第一段落からはじまった叙述のなかにあらわれてきた感覺的確信などは、考察者ヘーゲルが日常卑近な意識を自分の語彙をもちいて再構成した結果うまれたものでしかない。生身の人間のもつ認識を包括的に Wissen として提示し、感覺的確信を sinnlich な Wissen であると限定したのはヘーゲルで

15

— 原語は an。英訳では in と within がもちいられている。

1 ある。その Wissen も感覺的確信もなほどこか包括的であるだろうが、事例として挙げた一瞬のスナップショット状態が示すように、実際には自分がいてもそのを感じしているというだけでもヘーゲルの述べることは成りたつ
のだから、その Wissen は個別の人間の個別の知であっても一向にかまわない。しかも包括的であろうと個別的
であろうと、Wissen が *similich* と限定されて感覺的確信が打ちだされたことに変わりはない。そう限定したの
はヘーゲルである。

5 この限定は——すでに述べたように——感覺的確信のあずかり知らぬところである。あずかり知らぬという点
では、感覺的確信が感覺的確信であることも、それが直接態であると同時に直接態のひとつであることも、そし
て単なる存在がその本質や真実であることも、感覺的確信のあずかり知らぬところである。ことばを伴った認識
活動をしてきたのは、これまでのところ、考察者ヘーゲルだけである。Wissen も感覺的確信もまだなにひとつ
10 ことばを発していない。そして *Sinn* ないし *similich* を「見る聞くなど感覺器官に固有の働き」で受けとめるか
ぎり、*Auffassen* がはたらいていないのだから、どちらにも媒介云々を認識する能力があるはずはないが、そ
のように設定したのもヘーゲルである。

それだけではない。そもそもこの『精神現象学』では、最初は叙述の場が成立していなかったのだから、叙述
されるものはどれもヘーゲルの記したことばとして存在していただだけである。狼少年の物語がよく例示するよう
15 に、Wissen をふくむ文をひとつ記すことが現実における Wissen の存在を保証するわけではない。その Wissen
が個別の人間のもつ Wissen であると保証するわけでもない。ましていわんや抽象的語彙の連続するヘーゲルの
ことばに接して読者が脳裏にあざやかな現実を思い描くわけではない。そのかぎり、第一段落の冒頭で Wissen
を提示した文は、ただのことばでしかない。

1

だれであってもことばを記すだけで内容を現実に存在させることはできない。指示対象が現実にあつて初めてことばは現実性をもつ。ここまでのヘーゲルのことばの現実性は、読者が自己の現実をふり返つて得られた認識によつて成りたつてにすぎない。さらにどのような現実をヘーゲルが抱えていたかは杳として知れない。それでも少なくともこれまでの検討から次のように言うことはできる、つまり、ヘーゲルの述べた内容の現実性が確認されたのは、すべて人間の卑近な日常に照らすことによつてである、ヘーゲルの述べる「自分」もまた、日常卑近な生活に照らして初めて現実における存在がみとめられ、それでヘーゲルが感覺的確信と呼ぶ Wissen の一形態ないし状態も存在がみとめられ、叙述の場もみとめることができた、と。

5

ところが、次の第六段落に眼をむけると、「感覺的確信はみずからに『このものとはなにか』と問わなければならぬ」とある。これまでも、「確信がそれ自体の眞実として言いあらわす単なる存在」のように、感覺的確信がことばをもちいると読める箇所があつたことは事実である。しかしそれは実質的にヘーゲルがそのように読み取つただけのことである。ところがここでヘーゲルは明らかに感覺的確信がことばを話せると解する。つまりそのように設定する。いつから感覺的確信はことばを使えるようになったのか。そもそもこれまでの検討はどこでヘーゲルの理解からずれたのか。

10

simlich の理解からである。この語の中心をなす Sim には大別して五種の働きが存在していたが、ヘーゲルのもちいる simlich には最初の働きしか込められていないと考えるをえず、Aufassen がはたらいていないと読みとつたからである。ものごとの直接的な認識が可能になるのは意志の働きが介入しないときだけであり、語幹の fassen に能動性がみとめられる Aufassen はこの条件に反すると受けとめたからである。しかしそれでは街において聞きとつた靴音のように整合性のとれない事態が生まれるから、Sim を「感覺器官に固有の働きと

15

1 結びついて感情や思考やものごとの意味を統合的にとらえる働き」という第二義でも受けとめ、そう受けとめてから、あらためてヘーゲルの展開した文脈では *sinlich* が「感覚器官に固有の働き」でもちいられていると仮定して、ここまで検討をすすめてきたのである。

5 しかし第六段落に「感覺的確信はみずからに問わなければならない」という文が記されていることは厳然たる事実である。ヘーゲルは、当然、ことばを運用する基本的な能力やそれに対応する思考力や意志も感覺的確信にふくめていたと考えなければならない。そのように考えることは *sinlich* を第一の語義で受けとめたときの「直接的」や「直接態」の理解に反する明白な矛盾である。この矛盾や疑問を解決するため、「感覺的確信はみずからに『このものとはなにか』と問わなければならない」という文を検討してみよう。

10 内容にそくして考えるなら、この文はたしかに感覺的確信に言語運用能力があることを含意する文である。しかしこの文を記したのはヘーゲルである。この文の存在は、存在するというだけでは、感覺的確信に言語運用能力があると読める文をヘーゲルが記したことを意味するにすぎない。その記述が感覺的確信に言語運用能力があることを保証するわけではない。実際に感覺的確信がことばを発する現場がなければならない。

15 ところが、感覺的確信が問いを発することになる第六段落の叙述を見ると、奇妙なことに、感覺的確信が問はずの箇所ですべて実際に問いをだし、それに答えているのは——のちに実際に検討して明らかになるように——ヘーゲル自身である。感覺的確信はいかかわらずにも語らない。ヘーゲルが感覺的確信に代わって問いをだし、答も同じくヘーゲルが感覺的確信に代わってだしているだけである。こうした叙述を見るかぎり、ヘーゲルの言明とは裏腹に、感覺的確信にほんとうに言語運用能力があるかどうかはわからない、と判定せざるをえない。確定的に言えることはヘーゲルがあると読める文を記したことだけである。あるいはそうヘーゲルが設定しただけ

1
ある。

5
無によって人間の認識能力を二分すること自体が認識として粗く、現実には合わないからである。もちろん二分法は際限なく押しすすめれば微分されて二分性をうしなうであろうが、二分性をこのように解消することは、日常言語や自然言語と呼ばれることばの在り方にそぐわない。ここでそうした頭脳操作は不要である。ただ自分の経験をふり返るだけでよい。

10
像したり考えたりする好例である。そうした想像や思考は夢を見ないときでもはたらく。睡眠中でも覚醒中でもはたらく。それだけではない。ある時点で解決できない問題は、放置しておいても、時間とともに整理され、しばらく経った別のあるとき——それも意外なときに——ふっとそれなりの秩序をとってあらわれてくる。それで眼が醒めることもある。その秩序立てをするのが心であるか精神であるかはここで問うところではない。ここで大切なことは以上の事例がどれも意志の有無によって *Auffassen* の働きを二分することにたいする反例になっている点である。

15
それにそもそも、日常卑近な生活のなかで、人間は一般に意志の有無を意識しない。自分の言動を常に意識するわけではない。その言動に意志がともなっているかどうかをいつも確認するわけではない。これが一般にみとめられる人間のふだんの状態である。これまでヘーゲルはそのような人間を取りあげて考察していたと見なして

1 きたのだから、もう一度この状態を確認することから検討してみる。

5 ある時ある所にひとりの人間がいる。その人間は身体をもち、感じ考える能力もそなえている。当然、あれこれのことをする意志をもち、あれこれのときにあれこれの感情をいだく。そうして生まれた考えや感情は意識の対象にもなり得る。しかし人間が普段そのように在る自分をふり返り、ことあらためて自分を意識する機会は稀である。かつて「人木石にあらねば」と語られた、人間としてまったく自然なこの状態は、人間の「自然性」と呼ぶことが可能であろう。

10 それだけでなく、ふだん自分を意識しないこの状態は、ヘーゲルに倣って、人間の「直接性」と呼ぶことも可能である。その場合「直接性」は「意識が自覚的には自分にむかわず、意識によって自分が変えられることもない状態」と定義することができる。前の「もつとも豊かな認識」から「もつとも貧しい認識」へのどんでん返しは、この意味での直接性があつて可能になる。したがってヘーゲルは当初から「直接的」を二重の意味でもちいていたと考えなければならぬ。以下、そう考えて検討をすすめる。

15 ヘーゲルはこの拡大された意味の直接態にある人間の任意のひとりを考察対象にすえ、その人間を *Wissen* の面からとらえようとする。その *Wissen* を徐々に拡大させ、最後に絶対知に到達させる構想をもっていたところを見ると、ヘーゲルはどうかこの人間をまるごと、あますところなく捉えたいようである。しかしヘーゲルは画家でも音楽家でもない。三十歳をすぎてから哲学のなかに踏み入った遅咲きのこの人間に、いわゆる審美的才能は皆無である。ヘーゲルはことばしか使えない。しかし詩人ではない。現実の事態を解明することに精力を注いできた人間である。そのあげくに哲学の領域が開けてきたとあれば、ヘーゲルは *Wissen* に着目せざるをえない。

1 そのヘーゲルは、あるがままに、あますところなく人間の *Wissen* をとらえようとしているのだから、時代による粗密はあるが、人間が古代ギリシア・ローマの時代から繰りひろげてきた数々の出来事と思索もすでに念頭においている。しかし対象にすえた人間が当初から自覚的に考え行動したのではこまる。それでは人間のもろもろの能力を整理できない。

5 だから、その第一歩として、この人間は生活のなかでのふだんの状態にあると前提する。つまり拡大した意味の直接態にあると前提する。それからおもむろに *Wissen* を対象にすえる。その上で——ものが見えるのは眼があるからだという通念的理解にそくして——外界を認識するときに実際にはたらくのは、人間にそなわるもろもろの能力のうちで、感覚器官に固有の働きだけであると設定する。

10 この設定から例の「この人」や「このもの」が生まれてくるわけであるが、この前提と設定のもとで、直接態は二重になる。つまり、生身の人間は見たり聞いたりすることができし、意志があり、考える能力もあり、あれこれの感情をいだくこともできるが、活動として実際に可能なのは見たり聞いたりすることだけになる。このように前提し設定することは、ものを見るには眼があればよく、頭をはたらかす必要はないと考える通念的理解に、つまり拡大された直接態のなかにある人間によく適合する。

15 この通念は膨大な数の個人の経験を背景にしており、外界のものにかんずるかぎりには、その正当性を疑うほうが疑われる。しかし対象が人間になった途端、逆に、この通念をいだけ人間の理解のほうが疑わしくなる。外界のもの見え方については一応のところ共通の理解をもつ人間が、集団や個人としての人間の在り方にたいする洞察になると十人十色の域をでない。ヘーゲルにはこの十人十色の世界にたいして抜きがたい不信がある。ヘーゲルがとんでん返しを組んだ背景にはこの不信がある。ヘーゲルはこの十人十色の世界がそなえる理解を、整理

1
しながら批判せずにはいられない。だから、それほど恣意的に見えようとも、当初はまったく思考力のはたらかない状態を設定し、それからこの状態にもろもろの能力を積みかさねてゆく。結果的に、この前提と設定のもとでは、人間が考える能力を発揮しない（できない）段階が生まれる。

5
それが右に述べた通念にふさわしい状態である。より正確に記すなら、*Sinn*をいだけ人間は拡大された直接態にありながら、活動するのは感覚器官に固有の働きだけの状態になる。この状態は、生後半年の幼児の状態を見れば、おおよその見当をつけることができるだろう。この時期の幼児は自分の欲求をことばにすることができない。大人は自分の立場をこの幼児の立場に全面的にかさねることができない。（やはり感覚器官に固有の働きによって限定された「感覚的確信」が本当のところどのような状態にあるのかを的確に知ろうとするなら、推測する以外にない。）幼児が正確になにを欲しているのかと考えるようにも、大人は外部からその幼児が感じ考えることを推測することしかできない。

10
これはもの言わぬベツトを想い浮かべれば充分にうなずけるはずである。次の段階には鳴いたり吠えたりする動物が想定できる。ことばを話せる存在はその次であり、この段階にいたって初めて「感覚的確信はみずからに問わなければならない」というヘーゲルの文章とむすびつく。

15
要するに、ヘーゲルは十人十色の——それも読者をふくめた教養層から成る——世界に対峙しながら、そのなかの任意の人間の *Wissen* を、動物にも当てはまるレベルから再構成しようとし、ここでその *Wissen* に言語が使えるレベルをくわえたのである。あるいは考察対象が *Sinn* の第二義「感覚器官に固有の働きと結びついて感情や思考やものごとの意味を統合的にとらえる働き」をもつことを明示したのである。

ヘーゲルは——どれほど自覚的かはともかく——*sinnlich* の二義をつかいわけることで叙述する。その使い分

1 けは一方の意味を取りさることでも可能になる。つまり抽象することでも可能になる。しかし抽象というなら Sinn の意味を①と⑤にわけるとも抽象である。生身の人間においては Sinn が②「感覚器官に固有の働きと結びついて感情や思考やものごとの意味を統合的にとらえる働き」がはたらくのが普通であり、この状態があつて初めて①「感覚器官に固有の働き」を限定することができると言ひあらわすことも、個別の存在の個別の在り方を指摘した表現としては粗く、まだ抽象性を脱しない。第二段落のどんでん返しは、②の状態にある生身の人間が、外界の認識は①で成りたつという通念的理解にとらわれていることを指摘しただけのことで、すでに述べたとおり、こだわる必要がない。当然、言語能力の有無にこだわる必要もすでない。この段落で大切なことはヘーゲルがさらにどのような思考を展開しているかにある。だから次の文にむかおう。

10 「規定する」「措定する」

と言つてもそのほとんどはヘーゲルなりの定義がつづくだけである。その部分で後々のためにどうしても意味を確定しなければならないのは「規定する」と「措定する」である。第一のまとまりにある「規定する」のほうから検討しよう。

15 「規定する」は第一のまとまりのなかの「そしてこの区別は、私がたつたいま規定したようにはなく」にあられる。この「規定する」が直前の「つける」と実質的に同じであることにまず着目しよう。そうすれば「規定する」が別に理解しがい働きを指すのではないことがわかるからである。

右の文中で「規定する」は「区別」を目的語とする。その「区別」は本質と実例の区別や、直接態と媒介態の区別である。ヘーゲルは直接的なものにあらためて考察の眼をむけることによって、直接態と媒介態のあいだに

1 違いを見つける。ヘーゲルはその違いを「区別」と呼ぶ。そしてその双方を別々の語で示すことを「規定する」と名づける。だからその意味は「区別あるもの(違いがあるもの)をそれぞれ別々の語で呼ぶ」と整理することができる。あるいはこれは「ふたつ以上のものに違いが見つかったとき、それぞれに別の名称をつける」ことである。

5 このように整理してかまわない理由は「規定する」の原語 *bestimmen* の語源にある。この動詞は一般の用法でよく「定める」や「決める」と訳されるが、その語源上の意味は「声で印をつける」である。これは「あるものをこれこれの名で呼ぶ」や「あるものをこれこれと命名する」と言い換えることができる。

10 そのようにことばで印をつける必要があることはだれにでもすぐ見当がつく。頭のなかでもやもやしているだけでは自分がなにを考えているかわからない。そのままでは考えを先に進めることもできない。大多数の者にとつては、やはり、問題となる事柄にふくまれる多数の要素を、ことばをもちいてひとつひとつ区別してゆき、全体としてながどうなっているか、全体がどのような仕組みになっているかを明らかにする必要がある。このことばで印をつける活動のほとんどは、実際には自分の母語における言語慣習を踏襲することにはかならず、その踏襲を基礎とする。それでも、少なくとも、ある語をもちいてあるものの名を呼ぶことによって——そしてその名を呼ぶかぎりで——そのあるものが他のあれこれのものとは違うことはわかってくる。「規定する」はこのような働き、ことばをもちいるかぎりまったく基本的な思考上の働きを指していると考えてよい。

15 その働きを日常卑近な生活のなかで見ると、これは木が草と違うことを、ペンが鉛筆と違うことをことばで明示することである。あるものを「木」と呼び「青々」と形容し「茂る」と述べることで、そのあるものが切りたおされ製材された材木でないことを示すことができる。「木」と呼ぶこと「青々」と形容すること「茂る」と

1
いうことのどれもが「規定する」に当たる。他の在り方を排除するからである。実際には木ひとつ取っても種類や形状や植生に千差万別があり、同一の名称で呼ばれるものも育つ地方によって微細な違いがあるだろう。その違いをこまかく知るとなれば知る人ぞ知るの世界に入ってゆく。

5
そうした理解をふくめた知識・理解が辞典・事典や種々の書物に記されるものになる。ここで「規定する」という語によってヘーゲルの指摘することは、そのように記される知識・理解がうまれる基盤にある「ことばで印をつける」という活動によって、あるものが他のものと違うことを明示する働きである。その活動を語源上の意味とする原語 *bestimmen* のイメージは「この文脈でもなお原文に読みとることができる。それをここで「規定する」と訳すのは、周囲の語彙の抽象レベルに合わせてのことである。

10
そう訳すと原文でもたれていたイメージが棄てられる。これは翻訳の大きな欠点である。結果的にまったく抽象的な語彙の連続する、とりつくしまもない文章になる。しかしそのわかりにくさを翻訳のせいにするだけでは片づかない。ヘーゲルの展開する文脈がそもそも、結局は、抽象的なレベルにある。具体イメージをもつ単語も日常のレベルからこうした文脈に移し植えられると、途端に意味がとらえがたくなる。結果的にこの語の潜在的イメージを読みとることも困難になる。

15
しかも、この語もまた、基本義から理解しようとするれば、語源上の意味が示すように、第一段落の「ミズ」のところでも述べたときとまったく同じく、体験に訴える以外にない。長い歴史のなかで無数の人間がつかみかさねてきた言語体験が基盤にあるから、この文脈のようにほとんどイメージをとまなわないう法から語義を読みとるこ

1 とも可能になるのである。

原語にそなわるイメージの大切さは語源辞典の記載をさらに調べることで示すこともできる。その実例としてまたこの *bestimmen* をとりよう。十八世紀にはこの「規定する」から哲学の領域で「定義する (*definieren*)」の意が発展している。この動詞 (英語で *define*) の基本義は、中核部分をになう *Wort* が「輪郭や境界」を意味することに明らかのように、「輪郭・境界を劃定する」である。この語義の基盤にもイメージがある。よくもちいらるる訳語「定義する」はその劃定する対象を語に限定したときの意味である。ヘーゲルの展開した文脈では、たとえば本質と実例のそれぞれの輪郭をことばをもちいて劃定して双方の違いを明らかにしたことがそれに該当する。

10 その劃定のためにヘーゲルがあれこれの前提や設定をおこなったうえに、*beherrschaften* などをもちいてさらに考えを積みかさねてきことは言うまでもない。それなら「種々の前提や設定などをおしてあるものが他のものと違うことを明示する」がこの文脈でヘーゲルのもちいた「規定する」の語義であると打ちだすことも可能である。ヘーゲルがものごととの在り方を二分し、直接的か媒介されているかがそう二分するときの指標 (印) になつていた点に着目するなら、「あるものを他のものと区別する指標 (印) をことばで明示する」と言いあらわすことも可能である。

15 このように、難解で有名なヘーゲルの文章であつても、語源を利用しながら丹念に個々の語義を掘りおこな

一 残念ながら翻訳では原語にそなわるイメージと体験に訴える側面とを充分にいかすことができない。註解という形式をとつたのはそのためである。

ら、ヘーゲルの思考プロセスを追うことができる。晦渋だからといって諦める必要は毛頭ない。この語はヘーゲルの思考が展開される過程で厄介な意味をおびるようになってゆくが、ヘーゲルの思考はまだはじまったばかりである。ここでは「規定する」者がヘーゲルであるという点を失念しないかぎり、これ以上に語義を詮索する必要はないであろう。第二のまとまりの内容を検討しながら、次の「措定する」の検討にうつる。

第二のまとまり

このまとまりは直前に本質と実例などの区別が「それ〔感覺的確信〕のもとにある」と記された状態を説明した部分である。(ここで新たな思考プロセスがまたひとつ導入されるが、それはあとで触れる。)ヘーゲルがしばしばもちいる「措定する」はその最初の文「一方はその〔感覺的確信の〕なかで単に直接的に存在するものとして、あるいは本質として措定される」のなかにある。

ここで「措定する」と訳した語は *setzen* (英語で *set*) である。ふつうは「置く」や「据える」と訳されるまったくの日常語である。その *setzen* はドイツ語で *setzen* と対をなす。この対は英語で *set* と *sit* になる。そのどちらもが基語にもどれば *setz* で、自動詞と他動詞の区別がつかない段階になる。

この対は日本語で「すえる」と「すわる」になる。ドイツ語と英語の場合も、日本語の場合も、語根は同一であると推定できる。どれもがイメージをともなった人間の基本的な動作をあらわし、その意味ではなんの変哲もない語である。そしてこの三言語のどれにおいても前者は他動詞である。「すでに存在するものやだれかがつくったものをどこかに置く」がその具体的な意味になる。置き方や据え方はいろいろであろうが、「すえる」べきものは、その動作をするまえに存在していなければならない。

1

ヘーゲルの展開した文脈で措定するまえにすでに存在するものは、感覚器官に固有の働きによって感知され確信されている外界のものである。すでに外界に存在しているものを「すえる」ということは——意味が基本義どおりであるかぎり——ありえない。「措定する」は「すえる」の基本義をふくむだけでなく、それ以上の活動がこめられていると考えなければならぬ。(別の場所に移して置きなおすなどのことはここで考慮する必要がない。)だから最初の文「一方(単なる存在)はその(感覚的確信を認識の領域とする場の)なかで単なる直接的に存在するものとして、あるいは本質として措定される」にもう一度もどって考えよう。

5

右の文中にある「一方」は「単なる存在」を指す。第二段落で「ものは存在する」と言われたものである。したがってこの文の骨組みをだすなら「単なる存在は直接的に存在するものとして措定される」や「単なる存在は本質として措定される」の意になる。単なる存在も本質も一瞬のスナップショット状態で例示するなら、それは朝の光である。

10

それを感じしたのは考察者ヘーゲルではない。感覚的確信である。ところが実際に感知されたものが感知する主体とのあいだにどのような関連にあるかを問うのは、ヘーゲルである。その問いに答えるとき、ヘーゲルは外界のものが感知されていることを確認したあと、その感知されたもの(単なる存在)を直接的に存在するものと捉える。そう捉えることは感覚器官に固有の働きによって感知され確信されているものにヘーゲルが判断をひとつ加えたことを意味する。これはすでに感知されたものを捉えなおした、と言うこともできる。

15

それなら右の文には、まずヘーゲルが「感知されたもの(単なる存在)を直接的に存在するものとして、あるいは本質として捉えなおす」という思考過程がふくまれる、と受けとめなければならない。「本質として捉えなおす」は「規定する」と言い換えることもできる。基本的に「すえる」の意をもつ「措定する」は、その捉えな

1 おす（規定する）活動にさらにヘーゲルによる判断が加わったものと考えなければならぬ。その判断をふくめて「措定する」の意味をだすなら、これは「すでに存在が確信されているものをこれこれのものとして捉えなおし、それをあらためて外界にすえる（存在させる）」の意になる。

5 単なる存在を捉えなおし、それを外界にすえたのは、考察者ヘーゲルである。これまでの叙述を読むかぎりそれ以外の者は考えられない。それなら「単なる存在は本質として措定される」は、ヘーゲルが感覺的確信に措定する働きをさせた、と受けとめることができる。ここで「措定する」が受動態で言いあらわされている意味はこの点にもとめられる。

10 第四の思考プロセスは措定する主体が感覺的確信であると叙述されるところに読みとれる。その叙述が実際には感覺的確信になり代わってヘーゲルが述べていることはこれまでと同じであるが、ここでヘーゲルは叙述者として存在するだけの姿勢をとる。考察の場に存在するのは、単なる存在と感覺的確信だけであり、前者が後者に認識され叙述される、とヘーゲルは叙述する。ヘーゲルは両者の関係を叙述しながら事態を明らかにする立場にあるという叙述をする。

15 このように意識を再構成しようとする、問題がひとつ生じてくる。それは「措定する」活動が依然として単なる存在にかかわらないという点である。ヘーゲルは感覺的確信に感知されて存在するものを「本質」や「直接的なもの」として措定させたが、単なる存在——一般的に言えば外界は、だから生身の人間も——措定の如何にかかわらず存在する。ヘーゲルに課せられた難題は依然として解けない。しかしこの点は次段落でふたたび触れる。規定すると措定するの意は現時点ではこれで充分として、第二のままとりの残りに検討を移そう。

その残りは「これ〔単なる存在〕が対象である。だが他方〔認識する主体〕は非本質的で媒介されたものとし

1 て措定される。これ「認識する主体」はその「感覺的確信を認識の領域とした場の」なかで、それ自体として存在するのでなく、他のものを介して存在する。これ「他方」が自分であり知、(ein Wissen)である」である。

5 「これが対象である」と訳した文は原文で「対象」の一語である。その「対象」が「単なる存在」を指し、「他方」が外界を感じたとき意識にうまれる認識を指すことは言うまでもない。「対象」の語義を構成要素から再構成するなら、それは「〜に対して立つもの」である。「対象」はここで「認識する主体ないし自分にたいして立つもの」である。このものとこの人の対置は、考察の場に存在するのが単なる存在と感覺的確信だけであるという先述の内容に対応する。

10 実際、ヘーゲルは右の引用で対象を認識する「他方」を「自分であり知、(ein Wissen)である」と記す。単なる存在がひとつ認識されただけだから、Wissenと言われるものがひとつしか存在しないのは当然である。この記述でヘーゲルはまだ「自分」と「知」との区別にまで踏みこんで考察していない。それでも「この人」と「このもの」を念頭に叙述を展開していることは明らかである。

15 この文脈でその両者の関係をとらえるときには、認識する主体(自分ないし知)が「それ自体として存在するのではなく」と述べられている箇所に着目しなければならない。ヘーゲルは第三段落で「一方も他方も、単に直接的に存在するだけでなく、同時に媒介されたものとしても存在する」と記していた。そのように記された時点では、「この人」と「このもの」あるいは「知」と「対象」は等置の関係にあった。どちらが優先的に存在するとは記されていない。ところがここでこの等置関係はくずれる。明らかにこの文脈は「単なる存在」のほうに重点をおいて展開されたものである。卑近な日常に照らすなら、その理由は外界に存在するものがなければ認識がうまれない、という点にもとめられる。

1 この点を証するかのように最後のましまりが続く。それが「この知はそれ〔対象〕が存在するから対象を知るだけであり、存在することも存在しないこともあり得る。だが対象は存在する。これは真なるものであり本質である。これ〔対象〕は知られる知られないに関わりなく存在する。これは知られないときにも存続する。だが知は対象が存在しないときには存在しない」である。

5 前半の「この知はそれ〔対象〕が存在するから対象を知るだけであり、存在することも存在しないこともあり得る。だが対象は存在する」は、卑近な日常の理解と変わりが無い。ここでもヘーゲルが自分の理解を卑近な日常のそれとかみあわせながら自分の考えを練っていることが見てとれる。

10 後半の最初にある「これは真なるものであり本質である」はヘーゲルが導入した語彙による説明である。日常語をもちいてやや省略的に言いあらわすなら、この文は「外界に存在するものは、実際に現実に存在するものであり、認識にとって必要不可欠なものである」と言い換えられる。

15 ここまで検討してくれば、ヘーゲルがなぜ「真実」や「本質」という語を多用するのか、その理由を推定することが可能になる。それは要するに文章が冗長にならないようにするためである。こうした語を必要とするたびに「外界に存在するものは云々」と記さなければならぬとすると叙述がはかどらない。「真実」や「本質」がかかわるものとの関連までそのつど記すのも煩瑣にすぎない。簡潔を旨とするかぎりどうしても用語を導入せざるをえない。だから「真実」や「本質」ということになるのであるが、双方とも日本語としてすぐ理解がえられる語ではない。できるだけ簡潔でわかりやすい日本語に訳そうとするなら、たとえば「本質」は「必要不可欠なもの」、「非本質的なもの」は「副次的なもの」と訳せば、文脈の抽象性をまぬがれることができるであろう。

残余の部分で指摘が必要なところは「これは知られないときにも存続する」等々と捉えることが感覚的確信に

はできないという点だけであろう。これを捉えられるのは考察者ヘーゲルだけである。はしなくもヘーゲル自身の立場が表にでてしまったことになるが、それはもはや咎めだてすることもあるまい。

これで第三―四段落の検討は終わるが、最後にひとつつけ加えておこう。次段落以降の叙述を見ると、ヘーゲルは自分の理解を卑近な日常のそれとかみ合わせていながら――というよりかみ合わせることによって――これまででの叙述にもどんでん返しを組みこんでいることがはつきりする。そのトリックは第四段落で「自分」ないし「自分の意識」に自立性がないと読める文をヘーゲルが展開していたところに組みこまれている。身近な動物にも存在が想定できるほどに根ぶかい自分がそう簡単に自立性をうしなうはずはない。それを知らぬヘーゲルでもあるまい。と言うより、ヘーゲルはだれよりも自分の自立性を信じる者である。喪つて初めて得られた自分を組織することによって自分の立場を築いた者がこの『精神現象学』を叙述するヘーゲルである。だから次段落以降の展開にトリックを突破するには、ヘーゲルがここまでの文脈で「単なる存在」を中心に叙述していたことを念頭にたもっておくだけでよい。